

中国六朝仏教儀礼における倫理

坂 本 道 生
(北海道大学)

一 はじめに

中国仏教における倫理を取り上げる際に前提として踏まえておくべき事柄に、第一に五常と五戒の一致、第二に中国人の禍福観の問題があると考えられる。

まず五常と五戒の一致とは次のようなことである。元来中国においては儒教の五常、すなわち人が常に守るべき仁義礼智信という思想があり、そこに仏教が伝来して中国仏教として受容されるために仏教の五戒と儒教の五常との一致を説き、中国仏教の特色をうち出したことは周知のとおりである。例えば、五戒と五常が同じであるという主張の一番古いものは北魏の偽経『提謂波利経』(散失)といわれる。また『顔氏家訓』等には五常と五戒の配当が記されているのである。⁽¹⁾

次に中国人の禍福観とは以下の如くである。晋の戴逵(二三五頃、三九六)『釈義論』の一節には『易』の「積善の家には必ず余慶有り。積不善の家には必ず余殃有り」という言葉や、『老子』の「天道親無し、常に善人に与(くみ)す」という言葉が挙げられるが、それが仏教移入以前の中国在来の禍福論として一般的に認識されていたのである。⁽²⁾

った。すなわち善あるいは不善の道德的な行ないの応報として、その結果が家単位で子孫に必ず禍福となって現れるという思想である。しかし当然ながら、善を行なったものが必ずしも幸福でないという隔たりが実際には存在したのであり、そこで戴逵は吉凶・禍福等については運命・宿命によるものとし、善惡の行ないは無関係であるとの立場から立論したのであった。その後、この『釈義論』を批判する廬山慧遠（三三四～四一六）の『三報論』、あるいは神滅不滅論争における神不滅論という過程を経て、仏教の因果応報の道理・三世輪廻の觀念が士大夫たちにも受容されていったのである。

右のことを前提として、本稿では六朝士大夫層の仏教信仰について、特に彼らが修した齋会や千僧会などを通してそれらの儀礼に用いられる懺悔文・願文のテキストを検討することにより、中国六朝士大夫層の倫理観について探りたい。南北朝の頃には皇帝や士大夫によって捨身・千僧会・無遮大会等が盛んに行なわれたことは史実に確認できるところである。

二 六朝皇太子・士大夫の懺悔文・願文

中央集権国家である中国では皇帝の権力が非常に強く、その立場は絶対的である。したがって皇帝が施主となって仏教儀礼を修す場合と、それ以外の皇太子以下臣下が施主となって修す場合とではその規模や主旨が大きく異なるのは当然である。ここでは皇帝以外が施主となる場合の仏教儀礼を取り上げる。

最初に「南斉皇太子礼仏願疏」という資料を検討しよう。これは南斉皇太子、すなわち南斉武帝（四四〇～四九三、在位四八二～四九三）の長子、蕭長懋（しょうちやうぼう）の礼仏願文であり、沈約（四四一～五一三）の手になる

ものである。沈約は宋・齊・梁に歴仕し、梁武帝のとき尚書令に就いた人物である。また文人としても名を馳せ、当時の文壇の重鎮であり『宋書』等の編纂者としても知られる。この沈約が皇太子に成り代わって書いた資料である。以下に見ていこう。

今、崇正殿に於いて、法会の千僧を奉還し、仍りて百僧を留め、八閔行道す。又た、二士を度して、同日に出家せしむ。惟だ願くは此の功德に籍りて皇帝陛下に資し奉る。寿は南山と共に久しく、年は將に北極と俱に長く、道は農軒より懸(つ)とめ、徳は堯舜より高し。上界は八万の劫、期す可く、下方は七百の祚(そ)、未だ擬せず。元良の位、長く膝下の飲を守り、上嗣の所、永く懷袖の愛を保たんことを。⁽³⁾

これによれば、まず千僧会という千人の僧侶に食事を供養する齋会を行ない、次いでその内の百人の僧侶で八閔齋を修し、同日に二人を得度させたということである。この法会(千僧会・八閔齋・得度式の三つ)の功德によって皇帝陛下の延命長寿・宝祚延長を願い、同時に皇帝の道や徳を讃えるのであり、また世継ぎとして皇帝の側に居られることを喜び、皇帝からの寵愛が永く保たれることを願うのである。さらに法会の功德は皇后陛下にも向けられる。

茲の法田を以って中宮皇后殿下に奉る。福履の善くする攸(ところ)思の届かざる無く、天母の徳、厚載も加うること能わず。任姒(にんじ)の盛、坤儀も寧んぞ匹(たぐ)うに足らんや。末は諸王妃、主宮掖、嬪房、未來の因縁、過去眷属に及ぶまで、並びに茲の辰(とき)を同じうし此の慈善に預からん。又た普く積苦の餓鬼、受罪の畜生、三途八難、六道十惡、水陸の蠢動、山藪翺飛、湿生化生、有想無想の為に、皆な今日の慈悲に藉りて、咸く浣濯を簞(そ)え、人天摂受し、幽顯証明せんことを、庶はくは衆力に憑りて共に相い津濟せん。⁽⁴⁾

すなわち皇后陛下の徳は大地より偉大なることを讃え、また皇帝皇后以外の諸王妃から未來と過去の眷属に至るま

でのすべてと、さらには「積苦の餓鬼」から「湿生化生・有相無相」のためにも、この慈悲によって人天と共に納受されることを願うのである。功德の対象が上は皇帝から下は有情無情にまでに及ぶのである。この三つの法会の功德によって、皇帝の寿命と皇位が永久なることを述べ、その上で一切衆生が摂受されることを願うのである。

次に、沈約の「千僧会願文」を取り上げる。これは沈約が施主となって千僧会を修した際に彼自身が作った願文である。

弟子沈約、十方諸仏、十方諸大聖、今日見前の衆僧に上白す。……（中略）……約、往夏を以って痼疾に遭罹す。帝上、哀矜して深く愍慮をたれ、月次徂暑（Ⅱ六月）、日は丙寅に在るを以って、仰ぎて千僧を其の私宅に会し、慈の重施を隆くし、限る所を知らざるなり。既已に洪徳を奉祇す。又た自ら家財を罄（むな）しくせんと思ひ、一挙にして千に盈たさんことを思い、力めたるも私弁し難し。稍や而して後に満たせば 事、或いは充たし易し。草堂の約法師、住する所の山寺、営を為すこと八集にして、其の一には、仰いで上定林寺の祐法主に憑り、今月二十九日の第十会には、百僧を所創の田廬に集めたり。「福は唐捐ならず」⁽⁵⁾と之れ経訓と聞けり。心路は皎然として又た此れに過ぎたり。凡そ涓毫もあらば応に来業を証すべし。巨と無く細と無く、咸く聖主に帰す。仰ぎ願わくは十方共に此の誓を明かさんことを。豈に少しく天眷に酬うるに足らんや。⁽⁶⁾

沈約は自身の病氣平癒のために皇帝から千僧会を修すことを促された。しかし、一度に千人の僧侶を自宅で供養するのは困難なため、様々な場所ですべて十回に分けて修した。その内八回は慧約（四五二―五三五）の住した草堂寺で、一回は僧祐（四四五―五一八）の助力を得て上定林寺で修し、そして第十回目は田廬に百人を集めたという。また「福德は空しいことではない」とは経の教えとして聞いているとおり、たとえ一滴の雫や一本の毛であっても来世の業果

の証となり、巨細に関係なく仏に帰するのであるから、十方諸仏がこの誓願を明かさんことを願うのである。また、皇帝の寵愛にわずかでも報いることができようか、という皇帝に対する沈約の忠誠心が見られる。しかしながら、沈約は病氣平癒のための手段として千僧会を修しているのであって、ここに現世利益的な目的が知られるであろう。

次に、江総（五一九―五九四）が著した「群臣、陳の武帝に請う懺文⁽⁷⁾」を取り上げよう。江総は梁・陳と歴仕し僕射尚書令に至った人物であり、また文筆に優れ、とりわけ五七言詩に長けていたという⁽⁸⁾。この資料には、陳武帝（五〇六―五五九、在位五五七―五五九）が捨身を行なった際に群臣は金銭等で贖い皇帝の位に戻したという記述がなされる。以下に見ていこう。

皇帝某諱菩薩は、睿哲総明にして広淵は聖に齊しく、心は虚空の若し。照は般若を窮め、大誓を発弘し、衆生を荷負す。神道会昌して、茲の景業を膺⁽⁹⁾けたるも、百王は既に季^(すえ)にして、運は艱難に属し、五岳維^(こ)れ塵にして六軍日に動き、劬^(ぐろ)勞^(う)念に在り、皇心に切なる有り。既にして深く苦空を悟り、極めて無我を信ず。宝台華柱は本とより実録に非ず、賊城樓櫓は苦具茲に多しと。遂に道場に坐し、禪室に静居し、善本を堅固にし、檀那を具足して、石壁山河、珍車象馬、頭目髓腦、妻子国城、鑾輅龍章、翠張玉机、福德の感ずる所、威恵の及ぶ所、蕭然として大捨して三尊に供養せざる莫し。便ち衣を崆峒に払い、歩を六合に高くせんと欲し、林間に到りて宴坐し釈種と同遊⁽⁹⁾す。

皇帝は睿哲総明であり、「その徳の」広く深きことは大聖にも等しく、心は虚空のようである。また、智慧を窮めた照臨（人民統治）をされており、大誓願を発して衆生を荷負されている。しかしながら、皇帝という大業を承けた歴代の君主は既に終末を迎え、国家運営も困難であるから、苦諦の相である苦・空・〔無常・〕無我なることを悟っ

ていると言う。そして大捨して三尊に供養し、林間に宴座し釈種と同遊したという。すなわち皇帝が自らの地位を捨て出家し、僧侶と同じ振舞いをしたことが述べられる。その後につづく願を述べる箇所には次のようにある。

謹んで如干錢、如干物を捨てて、仰いで三宝大衆に嚬（ほどこ）して、皇帝及び諸王の捨つる所を贖い奉り、悉く本位に還さん。伏して願わくは十方三宝、見前の大徳僧、慈悲の力を以って、無礙の心を用いて、坐道放光、顯揚宣説し、歡喜和合して超然として降許したまえ。当に皇帝、望雲望日の姿をして南山の固に等しくし、乃神乃聖の徳と北極の尊を同じくせんことを。⁽¹⁰⁾

すなわち、「如干錢」、「如干物」を仏法僧の三宝に施し、皇帝及び皇帝と一緒に捨身した諸王を贖い戻しているのである。皇帝の地位と徳が終南山の如く堅固であることや北極星と同じく尊きことを再現させるのである。そしてそれらの行いの後に発す願として、

願わくは、塵勞、雲翳俱に鎖え、億兆、天地と同じく泰からんことを。⁽¹¹⁾

とあるように、塵勞は雲や影のように消え、億兆の人民が天地と同じく安泰なることを願うのである。

以上、皇太子・士大夫の懺悔文・願文を三例見てきた。そこには皇帝への賛辞や、皇帝の延命・宝祚延長という内容が見られる。しかしそれらの表現は、自分たちの立場が皇帝の臣下という地位を反映した常套句ともいえよう。また一切衆生の救済という誓願が立てられているが、これも大乘仏教であれば必ず記される内容であろう。

三 六朝皇帝の懺悔文・願文

次に中央集権国家の頂点に立つ絶対君子としての皇帝の懺悔文・願文について検討したい。ここでは、『広弘明集』

卷二八悔罪篇に収録される懺文類の資料を以下に検討していく。⁽¹²⁾ はじめに、梁武帝（四六四～五四九、在位五〇二～五四九）の「金剛般若懺文」⁽¹³⁾ から見ていこう。

弟子は空無を修学し、智慧を修行し、早（つと）に尊道を窮め克己して法を行じ、方に家を以って国を形どり、近き自り遠きに及ぼし、一念の善、千里斯に応じ、一心の力、万国皆な歆び、恒沙の衆生皆な法侶と為り、微塵の世界悉く是れ道場ならんことを。⁽¹⁴⁾

武帝は『般若経』で説かれる空や智慧を修学・修行し、仏道を窮め仏法を行じたいと願ったのである。その一念の善行が千里にまで及び、また一心の力により国中を喜ばせ、無数の衆生が仏道修行者となつて、国土全体が道場となることを望んだのである。さらに文章は続いて、

今謹んで某処に於いて如干僧、如干日の金剛般若の懺を建て、見前大衆、至心に釈迦牟尼仏、金剛波若に敬礼し、長老須菩提に礼す。願わくは諸仏菩薩、般若の因縁を以って同時に集会し、万品を哀怜し、群生を護念して、恵流に引入し、同じく仏海に帰し、金剛の妙宝を得、金牒の深経を見、頂戴奉持して終に捨離せずして、己の利を逮得して諸の有結を尽くし、心、自在を得て復た塵勞なからんことを。⁽¹⁵⁾ 稽首して常住三宝に敬礼す。⁽¹⁶⁾

とあるように、僧侶若干名を集め幾日かけて、金剛般若の懺悔の道場を建立して礼仏するという。また般若の因縁によつて、諸仏菩薩が同じ会座に集まり衆生を哀愍・護念して恵流に引入し仏海に帰入させることや、金剛の妙法と金牒の深経を奉持し、心に自在を得て煩惱を断じようと願を述べる。皇帝としてすべてに君臨する王者の立場から、一切衆生の得道を願うのである。熱烈な仏教信者であつた武帝の心中を披瀝したものと受止められよう。

次に、陳文帝（？～五六六、在位五五九～五六六）の「薬師齋懺文」を取り上げる。願文に次のようにある。

弟子、司牧の方、寡（すくな）く、庶績未だ又（やす）からず。方に薬師の本願に憑み衆生を成就せん。今謹んで經教に依りて某処に於いて如干僧、如干日の薬師斎の懺を建て、現前の大衆、至心に本師釈迦如来に敬礼し、薬師如来を礼す。慈悲広く覆うて本願に乖かず、世間を棄てず。四等の雲を興し六度の雨を降らし、生死の火を滅し、煩惱の箭を除く。十方世界、輪燈の若くにして明朗に、七百の鬼神、尋いで結縷して応計し、障、逐つて杳然たり。災復た有ること無く、命は幡に随ひ続き漸く常住に登り、甚深の法性に遊び、無等の正覚に入り、行願円満にして薬師如来の如くならん。⁽¹⁸⁾

すなわち仏弟子である文帝自身は人民統治の術を僅かししか識らず、かつ多くの功績があるわけでもないで、薬師如来の本願によって衆生を成就したいと言う。それ故に薬師斎の懺を建てて礼仏するのであり、その功德によって広大な慈悲心を持つ薬師如来が世間を見捨てないこと、また文帝自身の四無量心や六波羅蜜という実践により、衆生を生死輪廻から解脱させ、衆生の煩惱を断滅させて悉く正覚に登らせたいと発願するのである。そして、皇帝自身も薬師如来の如くありたいと述べるのである。ここにも皇帝としての立場における衆生の得道を願う姿勢が見えている。つづいて、同じく陳文帝の「娑羅斎懺文」をみていこう。「娑羅」とは仏入滅の沙羅双樹（*Salvadora*）のことであり、すなわち涅槃經に基づいた斎会を意味する。ここには次のようにある。

弟子は閻浮に縁有りて、重任に囑当し、群生の顛倒を愍み、庶類の愚迷を嗟く。常に願う。六度の舟を造りて、之を彼岸に済し、一乗の伝に駕して、之を中道に驅らんことを。今謹んで太極殿に於いて無礙の大会、百僧一夕、娑羅の大斎を設く。⁽¹⁹⁾

右のように、文帝自身は皇帝という重要な任務を背負っており、衆生の顛倒や愚迷を哀れみ嘆いている。故に、一

切衆生を六波羅蜜の船によって彼岸に渡し、一乗の馬によって中道へ到らせたいと常に願っており、百僧を請うて沙羅の大斎を設けるという。沙羅斎を設ける理由が「一切衆生の救済」を目的としていることがここに窺われる。

最後に、陳文帝の「無礙会捨身懺文」を見ていこう。「無礙会」とは僧侶のみならず一般俗人に対しても供養することであり、僧俗の区別をせず平等に供養する法会である。これは陳文帝が、亡くなった皇太后の為に皇帝の位を大捨したときの懺文である。その冒頭には以下のようにある。

陳文帝、皇太后の為に宝位を大捨す。窃かに覲るに、雅誥の奥義に皇王、在予の言を興し、礼經の令典に聖人、罪己の説を揚ぐ。故に身を滅ぼし物を済うは仁者の恒心なり。己に克ち人に利するは君子の常德なり。⁽²⁰⁾

ここには身命を惜しまず衆生を救済することと、克己して他を利する行いが重要であると述べている。この「身を滅ぼし物を済うは仁者の恒心なり。己に克ち人に利するは君子の常德なり」の文言は、文帝自身が皇帝として保持している理念ともいえる表現である。さらに読みすすめると、

瑱を垂れ玉に憑るも、還りて萬乗の尊に非らざるを覚り、宁に当たり辰(い)を負うも翻りて万機の累を成すことを以(おも)う。夕に惕若(てきじゃく)として厲(はげ)みて、汲引を弘むことを思い、毎日丕顯す。七廟聖霊の奉為(おんため)に、皇太后聖御の奉為に、天龍鬼神・幽冥空有・三界四生・五道六趣・若しは色、若しは想、若しは怨、若しは親、若しは非怨親、虚空に遍く、法界に満ち、過去を窮め、未来を尽くし、無量名識、一切の種類の奉為に平等に大捨す。⁽²¹⁾

とあるように七廟聖霊から非怨親なるものまで、一切の種類の為に平等に大捨するという。さらに願文では、

今謹んで前殿において無礙の大会を設け、所願を奉行し、並びに諸の功德、具に前に列す。願わくは、諸仏菩薩、

冥空幽顯、俱に到りて証明し、智慧の日を開き、慈悲の雲を映し、宝幢を大千に樹て、法鼓を百億に撃ち、世界を震動し群生を覚悟し、三昧の淨光を放ち、一味の法雨を流し、愚癡を火甗に引き、煩惱を棘林に抜き、輪転の河を出で、無生の岸に到らんことを。²²⁾

というように、衆生が悟りを開き、生死輪廻の苦界から脱することを発願するのである。

以上、皇帝の懺悔文・願文を見てきた。皇帝という立場から強調されるのは一切衆生の救済という点である。このことは皇帝の言葉として他から要請され自らも自覚しているものであろう。この言葉が自身の率直な表明であるのか、あるいは表面上のことであるのかは置くとして、その背後にあるものは齋会・捨身などを修すことによって自身の滅罪や現世利益、国土安隱を望むものであり、それらの願望を儀礼において表明することによって、臣下の意識を平民の安隱に向けようとしたものと考えられることも出来よう。それはまた、陳文帝の「無礙会捨身懺文」に「身を滅ぼし物を濟うは仁者の恒心なり。己に克し人に利するは君子の常德なり。」とあるように、皇帝として平安に国家を統治したいという中国古来の王道にも似た政道の姿勢が文章表現として見られることになるのである。

四 ま と め

六朝士大夫層における仏教の因果応報・三世輪廻の思想の受容は、六道輪廻から解脱するための方法として自己の悪業について懺悔することや、僧侶や民衆に対して供養を行い善根を積むこと等の仏教儀礼に繋がった。それらの中における懺悔文・願文の文章表現は、国家の中や現実の政治の中におけるそれぞれの立場を反映したものであった。皇太子や士大夫の場合は皇帝の延命・宝祚延長を願うことや、皇帝の徳を讃えることが文章表現として見られる。一

方、国を司る皇帝として強調されるのは国家安泰であり、それは一切衆生の救済という誓願であった。その背後に現世利益的傾向が見られるのである。また皇帝としてあるべき政治態度、すなわち王道とも解釈しうる人民統治の姿が文章表現として確認できるのである。

註

- (1) 『大正蔵』五二卷、一〇七頁中
(2) 「安処子問於玄明先生曰。蓋聞積善之家必有余慶。積不善之家必有余殃。又曰。天道無親常与善人。斯乃聖達之格言。万代之宏標也。……(中略)……故知賢愚善惡脩短窮達。各有分命。非積行之所致也。」(『大正蔵』五二卷、二二二頁下―二二二頁上)

- (3) 『大正蔵』五二卷、三二三頁上―中
(4) 『大正蔵』五二卷、三二三頁中。『大正蔵』テキストには「未」とあるも、意味上から「末」に改む。
(5) 『妙法蓮華經』普門品「若有衆生。恭敬礼拝觀世音菩薩。福不唐捐。」(『大正蔵』九卷、五七頁上)
(6) 『大正蔵』五二卷、三二四頁上―中
(7) 『大正蔵』テキストには「群臣請隋陳武帝饑文」とあるも、明本に倣い「隋」の一字を除く。
(8) 『陳書』(中華所局、一九七二年)卷二十七、列伝第二十一、三四三頁―三四七頁参照。
(9) 『大正蔵』五二卷、三三一頁下―三三二頁上
(10) 『大正蔵』五二卷、三三二頁上
(11) 『大正蔵』五二卷、三三二頁上
(12) 『広弘明集』卷二八悔罪篇に収録される饑文類の主要先行研究として、塩入良道『中国仏教における饑法の成立』四〇四―四一三頁(大正大学天台学研究室、二〇〇七年)がある。なお筆者は、「金剛般若饑文」、「薬師齋饑文」などの経名を付した饑文類が、斎会・八関斎に関連するものであらうとの一試論を提示した(『天台学報』第五十一号掲載予定)。

- (13) 『大正蔵』 テキストには「波」とあるも、宋元明の三本に倣い「般」に改む。
 (14) 『大正蔵』 五二卷、三三二頁下。『大学』の「修身」・「齊家」・「治国」・「平天下」などという儒学の政治理念が想起されよう。

- (15) 『妙法蓮華経』 序品「諸漏已尽。逮得已利。尽諸有結。心得自在。」（『大正蔵』 九卷、一頁下）。これを踏まえた表現。
 (16) 『大正蔵』 五二卷、三三二頁下
 (17) 『大正蔵』 テキストには「杳然」とあるも、明本に倣い「杳然」に改む。
 (18) 『大正蔵』 五二卷、三三四頁中―下
 (19) 『大正蔵』 五二卷、三三四頁下
 (20) 『大正蔵』 五二卷、三三五頁上
 (21) 『大正蔵』 五二卷、三三五頁上
 (22) 『大正蔵』 五二卷、三三五頁上